
「フグ」

長根兆半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「フグ」

【Nコード】

N3065F

【作者名】

長根兆半

【あらすじ】

ポンポコ・スッポンポンポコポンポコポン・ポコポンスッポンポンガム公、グミ助、チヨコ坊の3人が繰り広げるコメディ小説。

「フグ」

ポンポコ・スッポン

ポンポコポン

ポコポン・ポコポン

スッポンポン

フグ食うと、フグ死ぬぞ……。なんていう駄洒落はお遊びとしましても、ま、御経験のある方は少ないと思いますが、フグ毒を少しだけ舐めてみますと、歯医者さんで麻酔をされた時の様になるんだそうです。

口の周りが、なんとなくだらしくなってるような気がする、あれです。

ところがフグ毒は神経毒で、気の毒ですが、神経が利かなく知るのだそうです。

さらに、ノドへ行き、気管支へ、そして肺へいき、肺が利かなくなってしまうんだそうです。

フグの刺身を俗に鉄刺。ちり鍋を鉄ちり。なんて言いますが、これは鉄砲を、撃てば当たると言う事から、フグを食べますと毒に当たる、と言う事をかけているわけでして、それで、鉄砲の鉄を取って、こう言うのです。

ですから、役者さんなどは、役が当たるという縁起を担ぎまして、講演前に召し上がるのだそうです。

あの、有名な歌舞伎の板東三津五郎さんも、其れで召し上がったのでしたが、量が多かったようで、本人には気の毒とは思いますが、板前さんが可愛そうでした。

有名な俳諧の人は、フグを食わなきゃ一人前じゃないなんていつて

おいて

「俳諧の ために河豚くう 男かな」（虚子）なんて皮肉っています。

「フグは食いたし命は惜しい」なんて川柳が有りますが、正直でいいです。

知ったかぶりに、素人さんがやってはいけません。フグ毒の名前をテトロト・トキシンと言うのだそうですが、無色透明無臭と来えますから、始末が悪い。

ですがあ、真水では洗い流せますから、ああそうですかとなりますが、安心は出来ません。

毒の強度はマウス、あのネズミで測るんだそうです。一グラムの毒で、二十グラムのネズミが死ねば二十マウス、十万匹死ねば二十万マウスといって、毒を二十グラム食べると人間は死ぬのだそうです。鮪の刺身が一切れ約十グラム、二切れでハイ・サヨナラとなるんですから。いきがってフグの肝臓とか卵巣、目など、血の気のある内臓には絶対に手を出してはいけません。ですから、フグを調理するには国家試験があるわけです。

一匹のフグを二十分で、五臓六腑を切り分けるわけです。この二十分には色々わけがあつて、お客様が待てる限度とも、フグ毒の見分けの速さを見ても言われています。

さてグミ助、こうした事、あおしたことを勉強しまして、親方から頂いたフグ庖丁を携え、今日がその試験日。革ジャンのガム公が付き添ってきました。

「指切るな。試験はペケでも仕事は出来るが、指切った日にや、明日の仕事に障るからな」

「ん・・・」

「出刃つてなアな、出歯つて言うくらいだ。噛み付かれたら傷は大きいぞ」なんてガム公が歯をむき出したりしながら、二人で試験所に来ました。

板前さんと言うのは、調理場にいますと、威勢が良いのですが、ど

うもこの、外に出ますつてえと、借りてきた猫のようになるようで、おとなしい。それでも、刃物所持公認なもんですから、いかにも人相が悪い。眉毛のない人。妙に青白い顔の人。半顔崩して鼻で笑う人。猫背で顎をしゃくる人。ポケットに手をつ込んで肩をすぼめ、天を見上げている人。

「お兄さん、ちょっと失礼いたしやす」つて言いたくなるような人ばかりが五、六十人。

この板前さんが調理場に入りますと、コアラかパンダにでもなったように愛想がいいのですから、憎めない。

まずは筆記試験。次が五種類のフグの鑑別。最後が除毒調理。

ガム公は、いても仕方ないので、近くでお茶でもと思って試験所の外に出ると、しつとりと着物を着こなしたチヨコ坊が向こうからやってくる。

「あれ、どうしたい」

「どうもしないけど、近くまで来たから、ついでよ」

「そうか、そのついでに丁度良い、お茶するか」

「あら、いいわね、たまには外でつて言うのも・・・」

「いきなり若返るんだな」

「フフ、照れてんのね」

「・・・カラカイやがつて、じゃ止めるか」

「意地悪、嫌い」

「はは、悪かった、謝る、謝るから、出して」

「なにそれ、つたく、分かってるわよ」と、いつものことながら戯れながら入った喫茶店。

なるほど、受験する板前さんと来た方々が一杯。難しい顔で、腕組みをしている人、先輩でしょう。

ガム公、昔を思い出し、親方もこうしてしてくれたんだな。グミ助のために、俺は来てよかった。そう思いながら、腕を組んで目を閉じます。チヨコ坊、気にもしないで

「ねね、何頼もうかしら、もうすぐ冬ね、寒いから、ココアにしよう」

うかしら・・・」言つて、ヒヨイと前に座っているガム公を見ますつてえと、眠っている。

まア、寝つきのいい人っているもんです。座った途端にもう、寝ちやうんですから。

そういえば、夕べ、居間でグミ助に受験の手解きを、遅くまでやっていた事を思い出し、ココア飲み終わるまで、なんて独りで決め、コートを脱いで、なんとなく周りを見渡します。

入り口あたりで、カヤカヤと華やいた声がします。見ると、銀行マンと一緒にたつた友達が、さすが銀座育ち、カジュアルがよく似合つて、三人連れでいます。チヨコ坊すぐ立つて行き

「おはよ」

「ああら、チヨコ坊どうしたのこんな早く。珍しいこともあるわね」

「ん、ちよつと付き添い」と言つて、寝ているガム公を振り向く。

友達が、チヨコ坊の視線を追つてガム公を見ますと

「あら、知つてるわよ、あの方。噂でだけど、板前さんでしょ」

チヨコ坊、ちよつと嬉しい。すると別の友達が

「ねね、来月私の誕生日なんだけど、頼もつかしら」

「あら、ぱあーつといくわけ？」

「三十路も半ば過ぎ、控えめよ。「自宅だと面倒でしょ、だから、どつか座敷のあるお店でと思つてるけど」するとチヨコ坊

「あら、だったら活春がいんじゃない」

友達が、あすこ、美味しいのよね、値段の割りに。ふうんと頷いた本人。

さて、フグ試験が終わつて、一月後に発表があり、見事グミ助は合格。

さつそくチヨコ坊の家で、昼飯兼用のハンガリーワインで乾杯。

「よかったなあ」

「ん、兄イのおかげだよ」

「ねね、友達の誕生日に、腕振るってもらおうかしら、今日」

「今日？」

勝春に取って返したグミ助、合格を胸に抱き、お客の誕生会。

まず、ヒレ酒で乾杯、煮凍りの突き出し、白子焼き、鉄刺の鶴、ダイダイをベースにした柑橘類に、昆布や鰹のだしが利いてるポン酢で召し上がる。そして葛きり、切り餅も添えた鉄チリ。華やいだ誕生会、やはり女性、歳の話になる。

そこに、店の若い女性がお酒を運んで来た。

すると誕生会本人が、彼女を見て

「いいわね、若いって」と言つと若い女性、冗談のつもりか

「ああ、あ、私も明後日が誕生日、二十一、もうフグ、お婆になっちゃう」

やれやれ、そろそろ一服アラドッコイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3065f/>

「フグ」

2010年12月29日14時36分発行